

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

# 胡適の実験主義の原点：「学原于思」の幼少時代をめぐって

著者	劉 紅
著者（英）	Liu Hong
雑誌名	Global studies
号	4
ページ	75-91
発行年	2020-03-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1419/00001171/">http://id.nii.ac.jp/1419/00001171/</a>

# 胡適の実験主義の原点 —「学原于思」の幼少時代をめぐって—

The Origins of Hu Shih's Pragmatism  
“Learning Originates from Thinking” in His Childhood

劉 紅

キーワード：胡適 実験主義 デューイ 宋明理学

## 1. はじめに

胡適<sup>1)</sup> (1891-1962) は、近代中国の代表的な思想家であり、文学者である。また実験主義（プラグマティズムの中国語訳、本稿では「実験主義」を一貫して使う）と自由主義の熱烈な信奉者と宣伝者としても知られている。その理性にあふれる社会改良思想や民主政治を求める発言は、常に社会一般と一線を画して注目の的となっていた。理性的、時には冷酷と思われる態度をもって胡適は、常に実験主義者かつ自由主義者であると自負し無政府主義や共産主義に反対し、実験主義の方法をもって民主政治の実現を目標に中国の社会改良と政治改革を主張していた。

特に 1915 年にコロンビア大学在学中に出会ったデューイの実験主義について、「あれ以来、実験主義は私の生活と思想の案内役となり、私の哲学の基礎となった」<sup>2)</sup>、「私の 40 年来の学問研究がすべて実験主義の思考法をめぐって行われ、その思考法が実に自分の学問研究の方法を 40 年間支配していた」と語り、実験主義がいかに自分の人生に影響したかを明らかにしている<sup>3)</sup>。その名言「大胆仮説、小心求証」（大胆に仮説を立て、慎重深く立証すること）も実験主義そのものであった。

デューイの実験主義とは、簡潔にいうと、恒久不変な真理を否定し、事実だけにに基づき、歴史的な態度 (the genetic method) をもって、問題の歴史的背景を探り、問題発生の根本的原因を突き止める。また解決策の仮説を立て、実験室的な態度 (the laboratory attitude of mind) をもって仮説を実践活動に移し、効果性のいかんにより検証することである。実験主義者は具体的な問題解決により一点一滴の進歩だけを認め一步一步の進歩を図るのである。実験主義の方法は社会問題に応用すると即ち漸進的改良主義であると言える<sup>4)</sup>。

デューイの「五段階思考法」は具体的な問題を解決する際の方法として知られている。それは、第 1 に疑問を感じる、第 2 に疑問の所在を突き止める、第 3 に疑問を解決するにあたり仮説を一つまたは複数設定する、第 4 にそれぞれの仮説の結果を想定して、問題解決に最も良いと思われる

る仮説を決める、第5にその仮説が正しいかどうかを実践により検証するというものである<sup>5)</sup>。事実だけを重視することと思考の方法を重視することがデューイの実験主義の特徴だと言える。

デューイの実験主義の受容は、胡適がデューイに師事した時だったため、時期的には渡米後だと思われるがちである。しかし、渡米前の胡適の生い立ちを見れば、必ずしもそうではないことがわかる。なぜなら、幼少時の胡適が受けた教育や家庭環境の影響、性格には実験主義の内容と一致する要素が多かったうえに、上海時代に発表した一連の文章やその行動には社会改良の思想が顕著に表れていたからである。

これらのことから、胡適が実験主義を受容した原点は渡米前にあり、実験主義の受容は必然なものだと考えられる。しかしこのような視点からの分析は十分になされていない。たとえば、賈祖麟『胡適之評伝』(1970年)、白吉庵『胡適伝』(1993年)、羅志田『再造文明之夢——胡適伝』(1995年)小田・季進『胡適伝』(1999年)、劉篠紅『嘗試者胡適』(2000年)、李敖『胡適評伝』(2001年)などの伝記には、胡適の幼少期が詳しく書かれているが、いずれも渡米前の胡適の言動に社会改良の傾向があったという記述にとどまっている。研究論文として、楊貞徳「胡適科学方法観論析」(胡適の科学方法観への分析)(2000年)は、朱熹の影響を受けた胡適の実験主義とデューイの実験主義との違いを比較するものである。緒形康「哲学と運命—胡適とデューイ—」(2004年)は、胡適とその実験主義は中国でどのような変遷を辿っていたかについて近代から戦後の毛沢東時代までを考察したものである。張静「胡適の旧白話小説について—啓蒙小説『真如島』を中心に—」(2009年)は、渡米前の早期の胡適の作品を通じて、新文化運動期の胡適の啓蒙思想は渡米前の思想の深化であることを分析している。しかし総じてみれば、これまでの研究には渡米前の早期の胡適思想と実験主義を関連づけたものがない。

胡適の実験主義の受容の原点を明確にさせることは、近代思想が中国に流れ込む20世紀初期において、胡適はなぜ実験主義を受容したのだろうかという問いを明らかにすることができると同時に、胡適の実験主義の受容をより深く理解するうえで非常に重要なことだと考えている。本稿では、胡適の生立ちと渡米前の言動の考察を通じて、その実験主義受容の原点が渡米前の早い時期にあったのではないかという仮説を検証してみたい。

## 2. 生立ち

### 2.1 宋明理学の影響

胡適は、1891年12月17日に上海で生まれ、安徽省徽州府(今の安徽省黄山市)績溪县上庄村で育った。原名は嗣縻であり、字は希疆であった。後に適と改名して字は適之である。

徽州全域は山地であり、風光明媚だが、耕地が少ないため、徽州人には故郷を離れ、全国各地で塩や質屋などの商売を運営して故郷にいる家族に仕送りをするという形で生計を立てる伝統があった。「無徽不成鎮」(徽州人がいなければ町とは成らず)といわれるほど徽州人は全国各地で商売を起こしていた。

一方、商売をする徽州人は故郷を遠く離れて長期的に大都会に住んでいたため、往々にしてその時代の新思想や新文化を先に取り入れることができた。徽州人はまた自分の子孫を都会に送り込み教育を受けさせていた。教育重視の伝統があったためか、歴史上、徽州出身の著名な儒学者が多かった。たとえば、宋明理学と呼ばれる儒学の代表者に北宋の程顥(1032-1085)・程頤(1033-

1107) 兄弟、南宋の朱熹（1130-1200）、清の江永（1681-1792）と戴震（1724-1777）らがいた。こうした儒学者がいたため、徽州では儒学の雰囲気が非常に濃厚だった。

宋明理学とは、衰えかけた儒学が宋明の学者により再構築され「新儒学」と呼ばれた学問のことである。明の王陽明（1472-1529）も代表人物の一人として広く知られている。さらにその中の一派の「程朱理学」は程氏兄弟以来の説が朱熹によって集大成されたものであり、宋明理学の中で最も影響力のある学派であった。宋の皇帝に「官学」とまで定められた。

朱熹の死後、当時の皇帝の宋理宗が朱熹に「太師」の号を与え、朱熹の書齋に「南溪書院」という字句を書き記するなどその影響力が依然として残され、宋明理学の理論も歴代皇帝の政權維持に利用されていた。ちなみに、宋明理学は、江戸時代に日本にも伝わってきて、幕藩体制の下で広く受容され、一般的に「朱子学」と呼ばれた。

宋明理学の重要な特徴の一つは、前代の学問に対して懐疑的な態度を持っていることである。特に宋明理学者は、それまでの学者による孔子や孟子などの古典に対する解釈に疑問を抱き、前代の学者の論説をそのまま受け入れていいのかを問い直し古典の再解釈を行った。明、清の時代になると、それは、学問として「考証学」と名付けられ「無証不信」（証拠がなければ信憑性がない）という信条の下で進められるようになった。

「無証不信」とは、宋明理学の懐疑的精神を表す言葉であり、根拠をもって疑問を解決するという学問の方法と態度を端的に示している。実験主義も、真理と思われてきたものは実践によってその効果が証明されるまで真理とは言えないと常に主張している。この意味で実験主義は、宋明理学の懐疑精神や「無証不信」の研究態度と一致していた。後年、胡適ははじめて実験主義に接した時、中国の考証学と実験主義とが非常に一致していることに驚き、この発見の第一人者だと自負した<sup>6)</sup>。

また、宋明理学は、教育においては「思考」の重要性を強調する。孔子の「学而不思則罔」（学びて思わざれば則ち罔し）、つまりひたすら学ぶだけで思考をしなければ物事の本質を理解することができないという名言が代表的であり、程頤にも「学原于思」（学問は思考に基づく）「学者先要会疑」（学ぶとはまず疑うべし）という名言があった。朱熹は「近思録」の中で「学原于思」の重要性を強調して「読書無疑者須教有疑、有疑者却要無疑、方為長進」と言い、教育者が学習者に懐疑精神を教えなければならない、疑問の解決によって「無疑」の境地に達せばはじめて上達すると言い、思考の重要性を説いた。

明の陳献章（1428-1500）も「学原于思、思原于疑、小疑則小進、大疑則大進」と言い、学問は思考に基づき、思考は懐疑に基づく。小さな疑問があれば小さな進歩を遂げ、大きな疑問があれば大きな進歩を遂げると主張する。こうして、宋明理学の代表者らは、学問を進める際にひたすら知識を吸収するのではなく、思考することを学問の基本として、思考の下で疑問を抱き、疑問の解明により学問を上達させることを繰り返し強調した。

さらに、朱熹は読書を奨励し「格物致知」（物事を研究していけばやがて物事の本質に通達する）を基礎にした実践論を唱えた。朱熹は「窮理之要、必在於学」（「理」を追求するには勉強しなければならない）と主張し学習の重要性を強調した。朱熹はかつて三回にわたり徽州に帰省し、毎回弟子を受け入れ3カ月滞在して講義を行っていた。そのため、朱子学は徽州にちなんで「徽派」とも呼ばれている。朱熹の影響の下で徽州では読書が一般的な社会風習となり、郷紳らは自ら教

材を編集してまで私塾で子供たちに朗読させた。胡適はこのような社会環境の中で育てられた。

学問研究の態度や方法においてそれまでの学者と一線を画した宋明理学者は、また「天民之先覺」（民衆より先に物事の本質を見極める先覚者）だと自負して社会に対して強い使命感を持ち、「理」を強調する。宋明理学の「理」とは宇宙が存在する原理のことである。自然界における原理は具体的な研究や実践を通じて探らなければならない。それに対して人間社会においては「三綱五常」の原理があり、人々が「理」にしたがい各自の社会責任を果たすべきである。「三綱」とは、君臣、父子、夫婦間の道德関係のことである。簡単に言えば、臣、子、妻は君、父、夫に従うべきとのことである。「五常」とは、仁、義、礼、智、信などの社会の道德関係のことである。つまり、人間は社会人として他人への愛、責任感、忠誠心、知識、誠実を持つべきとのことである。宋明理学者は、人間は家庭と社会の一員として「三綱五常」を全うすべきだと主張している。「三綱五常」は臣が君に服従すべきことを主張するため、歴代皇帝に民衆を支配する根拠として利用されていたが、先覚者としての社会的責任意識を養う思想でもあったため、宋明理学の影響の下で、社会改革を志す志士が輩出していた。胡適の父もその中の一人だった。

## 2.2 父の影響

胡適の最初の啓蒙教育をした人物でもある父親の胡伝（1841-1895）は、宋明理学の教育の下で、若い頃から社会的使命感が強かった。胡家の先祖は代々上海で茶屋を経営する商売人だった。胡家は胡適の祖父の代までに相当な財産を築いた。胡伝は幼少時から勉強したため、役人になることを期待され読書に専念させられていた。胡伝は科挙に合格した後さらなる学問を求め、上海の竜門学院に入学した。在学中、学校から配られた日記用のノートに朱熹や張載らの語録が印刷されていた。特に張載の語録「為学要不疑处有疑、才是進步」（学問とは疑わないところを疑うべき、そうすると真の上達になる）が胡伝には印象的であった<sup>7)</sup>。

学習科目の中で胡伝は特に地理に興味を持っていた。当時の政府と官吏の中国地理への無知、特に東北地方の地理への無知と管理のいい加減さに驚いたからであった。そして胡伝は、東北地方の地理の研究に生涯を捧げようと決心し現地調査を決行した。胡伝は北京を経由して今の黒竜江省にたどり着き、清王朝の駐黒竜江省の勅使・呉大澂（1835-1902）にその志と才能を認められた。中口の国境を定めた際、ロシアとの交渉に胡伝を同行させた。様々な任務を与えられた後、1892年2月呉大澂の推薦で、胡伝は台湾塩務総局提調（総責任者）に任命され、生後間もない胡適と妻を連れて台湾に赴任した。胡伝が自ら中国の地理を研究するという行動は、宋明理学者の社会に対する責任意識によるものだったのではないだろうか。

また胡伝は、宋明理学の懐疑精神を抱いていた。これについて、胡適は、父が黄河の治水が行われた際に作った詩をもって次のように説明した。

紛紛歌舞賽蛇蟲、  
酒醴牲牢告潔豊。  
果有神靈来護佑、  
天寒何故不臨工。

紛紛と歌舞して蛇蟲に賽で、  
酒醴と牲牢と潔豊を告ぐ。  
もし神靈来て護佑するならば、  
天寒しとして何の故に工に臨まざる。

父はこの詩に自分で注を付けて、「霜雪降れば、世俗の所謂「大王」「將軍」に化身して工に臨むというもの、みな跡を絶ちて現れず」と言っている。「大王」「將軍」というのは、いずれも神名帳に乗っている黄河の神様なのだが、治水区域内の水蛇や蝦蟆などは「大王」「將軍」の化身とみなされ、往々にして鄭重な祭祀と拝礼を受けた。治水と言えばこの上もない大事件なのに、国家の治水官吏たるものが、水蛇や蝦蟆などに頭を擦りつけて、憐みを乞わなければならないとはまさしく民族最大の恥辱である。父のこの詩は、公然とこの迷信を退けたばかりでなく、ごく手近な証拠で、この種の迷信のばかばかしさを証明したのである。この点、最も父の思想の傾向を表すに足りるものである<sup>8)</sup>。

胡適から見れば、宋明理学の懷疑精神の影響を受けた父が、当時中国で流行っていた迷信に対して、懷疑と批判を大胆に行ったのである<sup>9)</sup>。後述するとおり、11歳となった胡適も迷信に疑問を抱くのだが、これは父が残してくれた詩作の影響があったに違いない。

父からの影響について、胡適はさらに次のように述べた。

父は近世の自然科学の洗礼を受けることはなかったが、程頤・朱熹一派の理学の影響を深く受けた。……程朱一派は、極力「格物窮理」（物を研究して真の原理を極める）ことを提唱し、人に「即物而窮其理」（親身になって実践して物事の原理を極める）ことを教えた。これは近世科学の態度である。……父の作には「学為人詩」があった。

為人之道、非有他術。  
窮理至知、返躬踐実。  
黽勉于学、守道勿失。

人たる道は、他の術あるには非ず。  
理を極めて知に致し、躬に反りて実を践み。  
学に努め励み、道を守りて失うこと無れ。

これも程朱学派の「格物窮理」的な学問の態度を摂取されたものであった<sup>10)</sup>。

これは、胡適の識字用に胡伝が編集した教材の中の一詩であった。ここで、胡伝は、自然界の原理と人間社会の原理を両方語っている。つまり、学問研究の際に、実践を通じて物事の本質を追求して真の知に至るという態度と方法を持たなければならない。同時に、立派な人間になるた



めに人間社会の道徳である「三綱五常」の原理を守らなければならないと胡適に教えている。

これらの詩は私が四、五歳の時に読み習っていたものである。先生がどう解釈したか記憶にない。その頃私は多分これらの詩の意味が全然分からなかったであろう。父はあまりにも早く亡くなった。私が父と別れた時は、まだほんの三歳の子供だった。私は父の思想の直接の影響は全く受けていなかったわけだ。父が私に残してくれたものは、主に二つある。一つは遺伝である。なんといっても私は「父の子供」だから。もう一つは宋明理学の遺風である<sup>11)</sup>。

「父の子供」とは、社会的責任意識を持った立派な人間である父への自慢の気持ちがうかがえると同時に、自分も父のような人間になろうという意味も含まれているだろう。胡適は父が残した大量の日記や編集した教材を生涯大事に保管していた。四、五歳の頃、父の詩作が理解できなかったが、後年、胡適は父の年譜、日記、年表を整理したことから、父の遺稿を徹底的に読んでいたことが分かる<sup>12)</sup>。

こうして胡適は、父が残した資料から宋明理学の懷疑精神、実践の方法、証拠を元にする「格物窮理」の学問研究の態度及び知識人の社会的責任意識を受け継いだ。恒久不変の真理は存在せず、常に事実や証拠を重視し、疑問を抱き、実践を通じて真理や知識の正しさを証明するという実験主義の重要な要素が宋明理学の中でも十分表れている。社会的責任について、胡適は、アメリカ留学中、デューイからアメリカの教授が政治活動に参加する姿を見て感銘を受けた影響もあるが、父が残した教材や日記などを通じて間接的でありながらも早い時期から父の影響を受けていたと言えよう。

## 2.3 母の影響

胡適は穏健で、寛容な性格の持ち主として知られている。そのため、交友関係は党派や階層、身分を超えて非常に広がった。あまりにも友人が多く、「我が友人胡適之」という言葉が当時流行語ともなっていた。近所の小売り屋もこの言葉を口にしていたと言われている。そしてこのような性格があったからこそ、学問や政論において、彼は常に自分と異なる意見を尊重していた。自分が編集した雑誌に異見者の文章を常に載せていた。私生活では、母親が決めてくれた無教育の結婚相手を受け入れて生涯共に暮らしていた。さらに政治的立場においては、性格だけで説明しきれないが、胡適が終始武力革命に反対して漸進的社会改良主義を主張し続けたのは、このような性格と関係しているところもあると考えずにはいられない。穏健で寛容の性格の形成には生まれつきのところがあるのだろうが、幼いころの複雑な家庭環境と母親の影響が大きいと考えられる。

胡適の母・馮順弟は胡伝の三番目の妻であり、17歳の時に32歳年上の胡伝に嫁いだ。胡伝は生涯三人の妻を娶った。最初の妻は戦乱の中で死に、子供をもうけなかった。二番目の妻は男三人、女三人の子供をもうけた。その妻も結婚して13年目に病死した。

台湾に赴任する三年前の1889年4月に胡伝は馮順弟と結婚した。馮は無教育の農家の娘であり、胡伝とは年齢が離れていたが結婚生活は幸せだった。胡適は馮順弟の唯一の子であった。1892年、胡伝は妻と生まれたばかりの胡適を連れて台湾に渡った。

台湾に渡った後の子供時代について、胡適は次のように記述している。

父は大変母を愛していて、毎日いろいろと忙しい中、母に字の読み方、本の読み方を教えていた。この数年間の生活は、大変楽しいものであった。私も小さい時は大変父にかわいがられたので、満三歳にもならない中に、父は母に教えた赤い紙に書かれた字を、私に覚えさせた。父が教師を務め、母がそばで助教の役をした。私にとって初めての字だが、母はそれを機会に、すでに習った字を復習した。父が非常に忙しい時には、母が代理教師だった。私たちが台湾を去る時、母は千字近くを覚えていて、私も七百字あまり覚えていた。これらの字はみな父が自ら書いた楷書だったが、母は一生大事に保管していた。というのは、これらの四角い赤い紙の上にあるものこそ、みな私たち三人の、最も神聖な団らん生活の記憶なのだから<sup>13)</sup>。

しかし幸せな日々はわずか三年間で終わった。日清戦争で負けた清政府は日本と「下関条約」を結び、台湾を日本に割譲したため台湾の情勢が急激に悪化した。こうした中、胡伝は妻子を大陸に帰させ台湾の民衆と一緒に抵抗運動に参加した。1895年7月、持病の脚気病が再発したため、胡伝は大陸に戻らざるを得なくなった。帰途のアモイで54歳の若さで世を去った。妻は23歳で、息子の胡適は3歳であった。

胡伝の死後、胡適母子は胡適の5人の異母兄弟と一緒に生活することになった。この時、家運がすでに衰えていた。家計は胡適の次兄が上海で経営していた唯一の茶屋により辛うじてやりくりしていた。胡適の母親は大家族の家長となった。しかし自分より7歳年上の長女、2歳年上の長男、2歳年下の三女、4歳年下の双子の次男、三男のある家庭では継母として振舞うことは極めて困難だった。それどころか長男らの嫁にいじめられる毎日だった。この頃の生活について胡適は次のように回想している。

長兄の嫁は極めて無能でまた物の分からない人であり、次兄の嫁は物はあるが、器量が至って狭い人であった。彼女たちはいつも言い合いをしたが、母という和やかさの手本があったために、彼女たちもさすがに公然と罵りあったり、殴り合ったりすることはなかった。彼女たちが喧嘩する時には、ただ口も利かず、返事もせず、浮かぬ顔をして人に気まぐずい思いをさせるのである。二番目の兄嫁が腹を立てると、顔色が青くなり、一層怖かった。彼女たちが私の母に対して腹を立てる時も、やはり同様であった。私は初め、この経緯がさっぱりわからなかったが、そのうちにだんだん人の顔色を見ることを知ることになってから、私にもぼつぼつ分かってきたが、世の中で一番いやなものは何よりも腹を立てた時の顔である。また世の中で一番下等なことは、何よりも腹を立てた顔を人に見せることである。これは揶揄ったり、罵ったりすることよりも一層辛抱できない<sup>14)</sup>。

このような嫁たちのいじめに対して、「母の度量は大きく、気立ても好い上に、継母であり後添いであったので、母は何事にも気を配り何事も特別に辛抱した。……母は見聞きしないふりをしていた。時には母もとても辛抱しきれなくなると、こっそり門を出て、近所の立大おばさんの家



へ行って、しばらく座っていたり、裏門から出て、裏隣の度お婆さんの家へ行って、世間話をしたりした。母は二人の兄嫁とはいっても一言も口論しなかった」<sup>15)</sup>。兄嫁のいじめだけではなく、母は賭博で借金をした長兄への取り立てに来る人たちの対応もしなければならなかった。

長兄は幼い頃から放蕩息子で、アヘンや賭博に金を使い尽くした。金がなくなると家のものを売り出す。……あちこちに借金をつくり、毎年の大晦日に借金を取り立てる人が必ず大勢来る。……母はおせち料理や祭式やお年玉などの準備で行ったり来たりして、まるで目の前に誰もいないように振舞っている。深夜もうすぐ戸締りの時間になると、母は家の裏口から出て、近所の親戚を呼んで来て、一緒に債権者の一人一人に少しのお金を渡し、お詫びの言葉をたくさん言う。……母は一度も長兄を叱ることがなかった。そして、新年だから、彼女の顔には怒りも見せなかった。私はこのような大晦日を六、七回過ごした<sup>16)</sup>。

このような家庭環境の中で、母親が決してだれも責めず、終始寛容な態度をもって対応していたと幼い胡適の目には映っていた。母親の苦労を「私の不器用な筆ではその万分の一も書けない」と胡適は感歎した<sup>17)</sup>。「寛容」ということの大切さを母から学んだことを次のように語っている。

私は母の教育の下に9年間を過ごした。そして母の極めて大きな、きわめて深い影響を受けた。私は14歳で（実際はたった12歳と2、3カ月だったが）母のもとを離れ、この広漠とした人間の海で20数年間ただ一人ぐずぐずしていた。私を監督してくれた人は一人もない。もし私が一厘一毫でもよい心根を学んでいるとするならば、もし私がわずかながらも、人を遇し物事に接する和やかさを学んでいるとするならば、もし私が人に対して寛容であり、人に対して思いやりがあり得るとするならば——私はすべて私の慈母に感謝しなければならない<sup>18)</sup>。

「寛容」という概念は後に胡適思想の重要な内容の一つとなったが、幼い頃の複雑な家庭環境と母親からの影響があったといえよう。そしてこのように苦労した母親に対して、胡適は無条件に従っていた。最も典型的な例として、不本意ながら母が決めてくれた教育のない田舎の娘と結婚して生涯をともにしたことを挙げられるだろう。胡適と纏足の夫人との逸話は、近代思想の影響で自由恋愛を求め、親が決めた相手を拒否してあるいは結婚しても別の女性と暮らすことが多い近代中国知識人の中では、異様な光景として広く知られている。

## 2.4 懷疑精神を持つ小さな思考者

複雑な家庭環境に生まれた幼年期の胡適は内向的で読書好きだった。そんな胡適に母親はなるべく良い教育環境を作っていた。特に家計が衰えた中、胡適の異母兄弟らが胡適の教育費の支出に反対した。母親は「必ず読書させること」という父親の遺言を持ち出して家族の反対を押し切り胡適を塾に入れた。そして学費を2倍払って先生の特別指導を受けさせた<sup>19)</sup>。

胡適は3歳8カ月の時に塾に通い始め、すでに父の啓蒙を受けたため、当時『三字経』からではなく『孝経』『小学』『論語』『孟子』『大学』『詩経』『書経』『易経』『礼記』など深いものを読

んでいた。そしてその多くは朱熹が注釈したものであった。9歳の時、彼はさらに『水滸伝』、『三国志演義』、『紅樓夢』など中国の古典を読み、同年代の読書範囲を遥かに超えていた。そのお陰で、彼は中国古典の基礎を着実に身につけたのである。

こうした環境で育った胡適は勉学を通じて思考に富んだ性格を養った。その好例としては11歳のときのある出来事であった。ある日、彼は朱熹の『小学』を読んでいた時、司馬光の家訓に地獄を論じる「形既朽滅、神亦飄散、雖有鑕燒舂磨、亦無戸所施」という言葉があった<sup>20)</sup>。それは、体がなくなった以上、魂も飛んでいき肉体を白でこすってもどんな残酷な刑罰を与えても意味がない。人が死ねば、体も魂も同時に死んでしまうという内容であった。

胡適はそれを「繰り返して読み非常にうれしくなった。まるで地藏様が錫杖で指差して、地獄の門を開いたようだった」と興奮した<sup>21)</sup>。なぜなら、当時の中国社会では迷信がはびこっており、毎日神様を拝まなければ死後地獄に落ちて残酷な罰を与えられてしまうと思われていたからである。胡適も母の言いつけで毎日神様を拝み、地獄を恐ろしいものとして信じて疑わなかった。しかしこの文章により人間が死んでしまえば魂も同時になくなるのだから、人間が死後当然地獄に行くはずがないと思い、それまで言い伝えられてきた「地獄説」が頭の中で崩壊したのである<sup>22)</sup>。

その後さらに『資治通鑑』の中の範禪の「神滅論」を読み、範禪は体と魂との関係を刀と刃との関係に喩え、刀がなければ刃の鋭さもなくなるのと同様に、体がないと魂もなくなると主張する。胡適は、範禪の喩えが分かりやすいとしてこれに納得し自分が恐れていた幽霊や地獄が存在しないことを確信した<sup>23)</sup>。

彼は「神滅論」の正しさを立証するためにひそかに大胆な実験を行った。それは神像の破壊だった。神像を壊せば罰を受けるはずだが、罰を受けずに済んだため、胡適は自分が「十一、二歳の時にすでに無神論者となった」と自負した<sup>24)</sup>。実際、胡適は渡米後も周りはキリスト教の信者になった留学生が多かったが、終始無神論を貫いた。それは11歳の時の経験があったからだといえよう。

胡適は宋明理学の思考の精神と懐疑精神を身につけた少年となった。そして彼は神像崇拜や地獄説に疑問を感じ、神像破壊という実践行為に移して検証したのである。この過程は偶然にも実験主義の思考法と一致していた。

### 3. 近代的知識の吸収

#### 3.1 梁啓超『新民説』、嚴復『天演論』の影響

幼少時代に受けた中国伝統教育に加え、10代の上海時代に受けた近代的教育も後の実験主義の受容に大きな影響を与えたと考えられる。なぜなら、この時期、近代思想に触れた胡適には思想啓蒙を通じて社会改良を行うという傾向が顕著に表れていたからである。

1904年から1910年までの6年間、胡適は上海で学生生活を送っていた。この時期の中国の社会情勢といえば、1901年、義和団運動を鎮圧した後、清国政府は8カ国連合軍との間に不平等な「辛丑条約」（「北京議定書」とも呼ばれる）を結んだ。その結果、清国政府は社会から「媚外政府」と強く批判された。日本に亡命した梁啓超は急進的な民権思想を鼓吹し列強による中国分割の危機を訴えた。鄒容は、『革命軍』を通じて、数千年の専制体制を覆して、腐敗した清王朝を倒し漢民族の政権を作ろうと呼びかけた。同時に孫文の興中会は清王朝打倒・共和国建設を目指して革命運動を展開した。

こうした社会風潮の中、清王朝は政権維持のために各分野において改革を行わざるを得なくなった。教育においては、1905年9月科挙が廃止され、各地で物理、化学、地理、英語などの新しい科目が設けられるいわゆる新式学校が開設された。特に上海では新式学校が続々と作られた。また上海は当時国際的都会として、近代思想を宣伝する梁啓超の『新民叢報』や同盟会の『民報』を入手することが容易だった。胡適は上海で相次いで四つの新式学校で学んだ。それぞれ梅溪学堂、澄忠学堂、中国公学、中国新公学だった。最後の中国新公学では、彼は学生でありながら教員でもあった。

胡適が田舎から大都会にやってきた当初、いくつかのエピソードがあった。最初の梅溪学堂では、入学初日に胡適は上海語が分からなかったので一番下のクラスに編入された。入学してまもないある日、国語の授業で先生が「伝曰、二人同心、其利断金」（二人同心なら、鋭利で金を切れる）という言葉の出自を『易経』であるのに『左伝』と言った。胡適はその誤りをそっと指摘したことから、その日のうちに四級も上のクラスに進級させた。しかし編入されたクラスの当日の宿題は「原日本之所由強」（日本が強い理由）というタイトルの課題作文だった。日露戦争で日本が勝利した頃だったが、閉鎖的な田舎から来た胡適は「日本がどこにあるかさえ知らなかった」<sup>25)</sup>。

ちょうどその時、績溪の実家から三番目の兄が急病になり、至急に帰宅せよとの手紙が届き、彼は急いで上海にある胡家の茶店に帰った。そこで、胡適が次兄に尋ねたところ、次兄が『新民叢報』や『明治維新三十年史』といった近代日本の維新思想を宣伝する本を読ませてくれたため、胡適はようやく宿題を終わらせることができた。上海にやってきた当初の胡適は、中国の伝統的知識に長けていた一方、近代思想の知識が皆無だったことがうかがえる。

その後、胡適は梁啓超や鄒容らの本を読みはじめ、鄒容の『革命軍』を寮の消灯後、蠟燭を点して謄写するなど夢中だった<sup>26)</sup>。胡適は、当時の多くの青年と同じく、このような新しい思想に惹かれ懸命に吸収していた。近代思想を吸収した結果、胡適は14歳の時、政府に対して反逆的な行動に出た。梅溪学堂を卒業する前、胡適ら4名の優等生が学校から推薦され、上海道衙門<sup>27)</sup>の試験を受けることになった。本来、合格すれば役人になる道を約束される非常に名誉なことだが、4人ともそれを拒否した。背景には、日露戦争の最中の当時、上海の租界で中国人労働者がロシア兵に殺される事件があった。民衆はロシア兵を恨み、清国政府の中立宣言に不満を持っていて「倒清」心理が非常に強かった。胡適は同級生ら三人と政府批判の手紙を匿名で上海当局に送った。このような経緯があり、学校の意向に従い上海道衙門の試験を受けることを潔良しとしなかった。胡適らは、『革命軍』を謄写するほどの熱血少年が清王朝の官庁の試験を受けるわけにはいかないと拒否したのである<sup>28)</sup>。結局、胡適は卒業せずに学校を出る羽目になった。上海に来て一年足らずで胡適はすでに読書ばかりの少年ではなくなり、列強諸国に妥協しつづけた清王朝に強い不満を持つ熱血少年となっていた。

1905年の春に入学した澄衷學堂では、胡適は楊千里という教師と出会った。胡適のノートに「言論自由」との言葉を書き贈ったことから楊先生が近代思想を持った人物であることが分かる。また国語の授業で嚴復(1853-1921)の翻訳書『天演論』を読本にしたことで、胡適を『天演論』の世界に導いた。

『天演論』はイギリスの生物学者・進化論者トマス・ハクスリー(Thomas Henry Huxley 1825-1895)の著書『進化論と倫理学』(*Evolution and Ethics*)の一部が翻訳されたもので

ある。『進化論と倫理学』によれば、自然界の生物は恒久不変なものではなく漸進的に進化するのであり、進化の原因は競争により勝った者が自然に生き残るという「物競天択」の原理にあるとされた。この理論を人類にあてはめてみれば、文明化が先に進んだ民族は優秀な人種として生き残るという「社会進化論」になる。ハクスリーは、ダーウィンの生物進化論を人類社会に応用したのである。胡適はハクスリーの進化論思想に強く惹かれた。

当時の中国は、日清戦争で敗北した一方、康有為の維新変法が失敗し、光緒帝が西太后に幽閉されるなど内憂外患に翻弄される状態であった。中国社会は、列強に滅ぼされるのではないかと強い危機感を抱いていた。嚴復はハクスリーの『進化論と倫理学』を翻訳すると同時に、中国の現状を分析して自分の見解も多く加えて『天演論』を著した。嚴は中国が弱者のままで亡国の危機に陥ってしまう、そこから脱出するには努力して強国になる以外に方法がないと主張し、「弱肉強食、適者生存」という進化論的角度から国民の危機意識を啓発しようとした。『天演論』の影響について、胡適は次のように語っている。

中国が数回の戦争（日清戦争や義和団事件）で敗れ、辛丑（『北京議定書』）の屈辱の後、「優勝劣敗、適者生存」という概念は言うまでもなく寝耳に水であった。多くの人に絶大な刺激を与えた。数年の間、この思想は野原の火のように多くの青年の心を燃やしている。「天演」「物競」「天択」「適者生存」といった言葉は流行語となり、愛国志士の口癖となった。名前に使う人が多かった。……私の名前もこのような社会環境で誕生した記念品だった。……アメリカ留学試験を受ける 1910 年に「胡適」という名前を正式に使うようになった<sup>29)</sup>。

しかし、嚴復の文章があまりにも古文調で難解だったため、当時の若者たちは嚴復より梁啓超から受けた影響の方が大きかった。「梁の文章ははっきりと分かりやすく、濃厚な情熱を帯び、その結果読者は彼の後をついて行かずにはいられなくなり、彼に倣って考えずにはいられなくなる」と胡適は回想した<sup>30)</sup>。

梁啓超の有名な『新民説』は国民の改造が目的であり、病人の民族を生き生きとした活発な民族に作り替えようというのである。中国の現状打開には、根底から旧を除き、新を布くことにあると梁は呼びかける。また、どのように救国して進歩を図るかについて、梁は、数千年の政治体制を破壊粉砕することであり、その方法に、無血の破壊と流血の破壊があり、「破壊するも破壊、破壊せざるも破壊」と革命のスローガンを提出した。さらに、梁は中国民族には西洋民族の数々の美德が欠けていることを指摘して、独特な人種論を論じている。それは、世界の五大人種の中で白人が最も優れ、白人の中でさらに優れているのがチュートン人（ゲルマン人）であり、チュートン人よりもっと優れているのはアングロサクソン人であるというものである。中華民族は他の人種と比べて国家意識、権利、自由などあらゆる面において認識や向上心及び政治能力が欠けているため、中国では「新民」を作らなければならない。梁は「新民があれば、新制度がないことや新政府がないことを心配する必要があるだろうか」と新民を作る必要性を訴えた。

胡適は、梁の「新民説」に大いに共鳴して次のように述べた。



『新民説』の最大の貢献は、中国民族が西洋民族の諸美德を欠くことを指摘したところにある。……梁啓超は、満腔の情熱をもって無限の自信を抱き健筆を揮って無数の歴史の例証を駆使し、人を躍り上らせ、人に落涙させ、人に感激奮発させる十数篇の文章を組み立てたのである。……『新民説』など数編の文章は、新しい世界を開いてくれた。中国以外にもっと高等な民族、高等な文化があることを知らせてくれた。…その文章の魔力に強く惹かれた<sup>31)</sup>。

1906年の夏、学級長の胡適がある生徒への処分が不当であるとして学校側に抗議したため退学させられた。結局澄衷學堂でも卒業できなかった。しかし次に入学した中国公学では、この時期に受けた近代思想を文章にして発表する機会ができた。

### 3.2 武力革命に興味示せず——思想啓蒙活動の芽生え

中国公学は1905年12月、日本から帰国した留学生らが創立した学校であった。教職員と学生の中には孫文の同盟会の革命党員が多くいた。たとえば宋躍如、章炳麟、戴天讐ら有名な革命家がいた。そのため、中国公学では本部が東京だった同盟会の機関紙『民報』を入手できるうえに、革命の雰囲気が濃厚だった。

学校の管理は民主的だった。管理層では「執行部」と「評議部」と二つの管理部門が設置され、執行部の部員は任期があり評議部によって選出される。評議部では常に激しい議論が展開された。胡適は年齢上、部員になる資格がなかったが、議論の民主的やり方に惹かれ時々傍聴していた。胡適はここで初めて民主政治の基本的な仕組みを目にしたと言える。

聡明で年下の胡適は革命党の同級生らに非常に可愛がられていた。彼らは自分の革命活動すら彼に隠さなかった。例えば、ある日の夜中、胡適は急に革命党の同級生に呼び起こされた。禁止品を持参する革命党のメンバーが税関の役人に検査を要求されたため、英語が達者な胡適は税関の役人と交渉するよう頼まれたのである。結局、夜中は人がいず交渉できないまま帰ったが、胡適が非常に信頼されていたことが伺える。

そればかりではなく、中国公学では日本から帰国した留学生が中心だったため、下駄を履いた和服姿の学生が時々見かけられている。彼らは清王朝との別れを宣言しようとして清王朝の象徴と思われる辮髪を切り、若者の多くもそれを真似した。急進的な学生は辮髪姿を見かけると強制的に切ろうとすることも時々あった。しかし胡適は中国公学に在学した三年間、自ら辮髪を切ろうともせず強引に切られることもなかった。実際、胡適が辮髪を切ったのは渡米後のことであり当時としては遅いほうだった。

こんな環境の中で暮らしていた胡適は、革命党の同級生らと朝晩に共同生活をしているにもかかわらず彼らの政治活動にはまったく興味を示さなかった。彼らも胡適に同盟会への加入を勧めようとしなかった。彼らは当初から胡適の学者的気質を見極め、将来学者になるために学問に専念させるべきだと思っていたからであった。数十年後に、胡適は、ある同盟会の友人からこの理由を知らされた<sup>32)</sup>。これらのことから、アメリカ留学前の少年胡適は武力革命運動に全く興味を持っていなかったことがうかがえる。

学者肌と思われた胡適は、同盟会の同級生らの勧めで良い機会に恵まれた。それは、中国公学



の学生らが発足した「競業学会」の機関紙『競業旬報』で文章を発表する機会であった。『競業旬報』は教育振興、民主、社会改良を主旨とする雑誌であった。刊行された1906年から1909年までの4年間、胡適が14歳から17歳までの間、合わせて約15万字の文章を載せている。「競業旬報」の後半期になると、胡適は編集長まで任され雑誌全体がすべて彼一人の文章で占められた時もあった。内容は、近代的科学知識の普及から、連載小説、詩、評論まで広い分野に及んだが、思想啓蒙のような内容が多かったことが特徴だった。

「地理」と題する文章は、自然科学を普及することが目的ではあるが、地球が四角い形だという認識が民衆の間で一般的だった当時、思想啓蒙の意味合いがあった。地球が丸いものだ、と胡適は次のように分かりやすく説明した。

海に浮かぶ船は遠くからやってくる時必ず帆が先に見える。逆に去っていく船は船漕が先に見えなくなり、次に帆が見えなくなる、地球が丸い形になっているからこのような現象が起きる<sup>33)</sup>。

また連載小説「真如島」では、胡適は「迷信を廃除して、民知を開通する」ことを目的に11歳以来の「無神論」をもって迷信を批判した。たとえば、第八回では神が存在していれば悪事は起きる前に阻止されるはずであり、悪人も懲罰されるはずである。しかし現実を見れば、悪事は予防されていない、悪人も処罰されていない。したがって、神は存在していない、神を拜む必要もないと胡適は結論付けた<sup>34)</sup>。「無鬼叢話」の中で、先述した司馬光の「形既朽滅、神亦飄散、雖有鑪燒春磨、亦無戸所施」と範疇の「神滅論」を引用して地獄の存在を否定した<sup>35)</sup>。

さらに、「敬告中国的女子」（中国の女子に告げる）の中で、胡適は従来の女性観を批判した。胡適によれば、中国の女性が「女子無才便是德」（教育を受けない女性こそ良い女性だ）というように教育されてきたため、読書せずに外見だけに時間を費やした結果、男性社会の遊びものになってしまった。「あなたは真の人間になりたいのか、それとも、能無しの人間になりたいのか」と胡適は女性に問いかける。そして真の人間になりたいければ、まず纏足をやめるべきである。その理由は、第1に、健康に良くない。纏足が血行によくない上に、体力が落ちる原因になる。生まれた子供も弱い。第2に、纏足した女性は社会に出られなく地位が低い。次に、読書するべきである。女性は教育を受ければ自分が有用な人間になるだけでなく、子供の教育にも役に立ち子供を立派な人材に育てることができ、最終的に社会への貢献にもつながる<sup>36)</sup>。「論家庭教育」（家庭教育を論じる）の中で、胡適は女子学校の設立まで提案した。それは、中国の国力が弱い原因が家庭教育にあり、家庭教育の鍵は母親にあるため、子供の教育を立派に担える母親をまず養成しなければならないとの見解を持っていたからであった<sup>37)</sup>。

女性問題のほかに、伝統的「孝行」に対しても胡適は批判を行った。「論繼承之不近人情」（跡継ぎの非情理を論じる）の中で、中国では親が自分の養老や死後の供養のために男の子を生み後継ぎさせるのが一般的だが、息子が必ずしも親孝行の人間になるわけではないため、このような考え方は危険だと胡適は指摘し、なぜ息子を生まなければならないのだろうかとの疑問を持ち次のように述べた。

私はここで極めて孝行な、永遠に孝行な子供を我が四億の同胞に推薦したい。この子供とはだれか、即ち「社会」である。……御覧なさい。かの英雄豪傑や仁人義士の名誉は、永久に伝わり、長く消滅しない。全会社はみな彼らを記念する。彼らに子孫の有無を問わず、私たちは彼らを記念していつも衰えない。というのも彼らは社会に功績があったからこそ、社会は永久に彼らに感謝し記念するのである。一人の人が社会に有益な且つ有効な事業を成しえたならば、全社会をすべて自分の孝子賢孫とすることができる<sup>38)</sup>。

つまり社会に有用な人材になり貢献する人間になれば、社会の人々に供養されると胡適は提示していた。

迷信問題、女性の纏足と教育問題、孝行問題などの発言は当時として非常に大胆で常識を破るものばかりであった。10代の時に胡適はすでに鋭い洞察力を持っていたことがうかがえる。社会の常識や風習に大胆に疑問を投げかけ、解決策まで提示していた10代の少年とは思えないほどの分析力を見せた。

また、胡適はこうした中国社会の問題が存在している原因は「思考しない」ことにあると指摘して、「苟且」（考えることなく生きる）と題する文章の中で、胡適は、将来を深く思考することなく成り行きに任せて人生を送ることが社会の一大疫病であり、数千年の民族精神を病死させてしまったと説き、次のように嘆いた。

我々の民衆を見よう。今年この人が皇帝になれば、彼もおとなしく服従する。来年あの人が皇帝になれば、彼もおとなしく服従する。相手はどんな人であれ、彼は奉仕する。今もまだ、だれもおとなしく順民になっているのではないか。民衆はどれほどいい加減に生きているだろうか。科学知識に対しても全く興味を示さない。思想と精神においてもどれほどいい加減ではないだろうか。……祖国は本当に救えなくなる。ああ、憎らしいよ、いい加減<sup>39)</sup>。

さらに、「真如島」第11回の中で、宋明理学の程頤の「学原于思」（学問は思考に基づく）の重要性を強調し、思考しないことは多くの社会問題の原因だと指摘した。この時期胡適は、すでに「思考」を重要なテーマとして考えていた。「私は後の思想がハクスリーとデューイの方面に辿り着いたのも、まさしく私が十何歳の時からあれほど思考の方法を重視していたからである」と胡適は回顧した<sup>40)</sup>。この時期の胡適の思想は未熟だったが、思考を怠る国民性といった伝統風習への批判は鋭かったといえよう。

実際、『競業旬報』の編集長となった胡適は第37期の「社説」の中で、『競業旬報』の主旨を「1、これまでの悪習慣を改めること。2、これまでの野蛮な思想を改めること。3、祖国を愛すること。4、道徳を重んじること。5、独立精神を持つこと」と改めた<sup>41)</sup>。この時期の胡適には、思想啓蒙を通じて社会改良を図ろうとする傾向が顕著に表れた。

そして、この時期の見解は、1917年に中国で「文学革命」を起こし思想界の指導者となった胡適の社会啓蒙活動の内容とかなり一致していた。「自分でも大変不思議に思うことは、後日私の重要な出発点となったいくつかの思想が、あの17、8歳の時に、早くも非常にはっきりした傾向を

示していたことである」と本人も驚きを隠していない<sup>42)</sup>。

#### 4. おわりに

以上のことから分かるように、胡適は、儒学の雰囲気が濃厚な環境に生まれ、幼いころから宋明理学の教育を受けていた。そして、宋明理学の懐疑精神、思考の重要性などの教えを受けた。家庭では父親の社会的責任意識、母親の穏健で寛容な性格を受け継いだ。

さらに、『競業旬報』で発表した一連の文章から見ると、10代の胡適には、すでに思想啓蒙の意識と社会改良主義の傾向があった。それは梁啓超や嚴復らの近代思想の宣伝の影響ではあるが、この時期熱血少年であるにもかかわらず胡適は孫文の武力革命活動に全く興味を示さなかったことから見ると、穏健な性格による一面もあると言ってもよからう。

また、少年期の胡適はすでに学問の方法を重んじていた。胡適自身が言うように「私は十何歳の時に、すでに懐疑好きな傾向があった。特に宗教に関して私は多くの問題に疑問を感じていた。私は特に迷信に反対した。……私は疑い始めると、必ず批判をもって証明あるいは反証をする。……私は十何歳の時にすでに疑問を解決する方法を探していた」<sup>43)</sup>。その意味で、デューイの実験主義思考法との出会いは、胡適が「科学的方法」を探していた結果だったと言え、実験主義との出会いは、それまで探していた思考の方法が理論化されて表れたといえよう。

思考の方法を重視し、社会問題を一つ一つ解決することにより社会の進歩を図ると主張する実験主義を受容することは、胡適にとり必然なことであった。そして、その原点は、幼少時代に受けた中国の古典教育にあり、上海時代に受けた近代思想にあったのである。

#### 注

- 1) 1910年から1917年の間、相次いでコーネル大学とコロンビア大学で学んだ。1917年に陳独秀が北京で主宰した雑誌『新青年』に口語体で文章を書くことを主張する「文学改良議」をアメリカから投稿して中国で「文学革命」を起こし、一躍有名となった。この文学革命はさらに全国規模な「新文化運動」まで発展した。帰国後、26歳の若さで北京大学の教授となり、思想啓蒙と政治批判を繰り返した。1938年から1942年まで駐米大使として日中戦争期の対米外交を行っていた。戦後北京大学学長となった。1949年に共産主義に反対するため、中国を離れ再び渡米した。1958年に台湾中央研究院院長に就任した。1962年、台北で死去。
- 2) 胡頌平編（1990）『胡適之先生年譜長編初稿 1』聯經出版社、209頁。
- 3) 吳福輝編（1995）『胡適自伝』江蘇文芸出版社、207頁。この『胡適自伝』には「四十自述」と「口述自伝」の二部が収録されている。
- 4) 歐陽哲生編（1998）『胡適文集 2』北京大学出版社、217頁。「杜威先生和中国」（デューイ先生と中国）を参照。
- 5) 前掲『胡適自伝』「口述自伝」210頁。
- 6) 同上、210-211頁。
- 7) 同上、143頁。
- 8) 前掲『胡適自伝』「四十自述」38-39頁。吉川幸次郎訳（1946）胡適『胡適自伝』養徳社、61-62頁を参照。この日本語訳の『胡適自伝』は胡適の単行本『四十自述』の翻訳であった。
- 9) 前掲『胡適自伝』「口述自伝」145頁。

- 10) 前掲『胡適自伝』「四十自述」39頁。前掲吉川幸次郎訳『胡適自伝』37頁を参照。
- 11) 同上、40頁。
- 12) 前掲『胡適文集 1』「鈍夫年譜」「胡伝日記」「先父年表」を参照。
- 13) 前掲『胡適自伝』「四十自述」22頁。
- 14) 同上、35-36頁。前掲吉川幸次郎訳『胡適自伝』57頁を参照。
- 15) 同上、36頁。
- 16) 同上、35頁。
- 17) 同上、35頁。
- 18) 同上、37頁。前掲吉川幸次郎訳『胡適自伝』56頁を参照。
- 19) 同上、27-28頁。
- 20) 同上、42頁。
- 21) 同上、42頁。
- 22) 同上、42頁。
- 23) 同上、43頁。
- 24) 同上、42頁。
- 25) 同上、51頁。
- 26) 同上、52頁。
- 27) 清政府の行政機関であり、上海市の役所にあたる。
- 28) 前掲『胡適自伝』「四十自述」52頁。
- 29) 同上、55頁。
- 30) 同上、56頁。
- 31) 同上、58頁。
- 32) 前掲『胡適之先生年譜長編初稿 1』67頁。
- 33) 周質平編（1995）『胡適早年文存』遠流出版社、「地理学」6-7頁。
- 34) 同上、「真如島」第八回 54-58頁。
- 35) 同上、「無鬼叢話」156頁。
- 36) 同上、115-124頁。
- 37) 同上、168-170頁。
- 38) 同上、171-174頁。この論説は最初『安徽白話報』に掲載され、後に『競業旬報』第29号に転載された。後に胡適の名言「不朽——我的宗教」の主旨となり、「社会不朽論」として知られている。
- 39) 同上、181頁。
- 40) 前掲『胡適自伝』「四十自述」73頁。
- 41) 前掲『胡適早年文存』194-197頁。
- 42) 前掲『胡適自伝』「四十自述」72頁。
- 43) 前掲『胡適自伝』「口述自伝」213頁。

## 参考文献

- 白吉庵（1993）『胡適伝』人民出版社  
曹伯言編（2001）『胡適日記全編』（8巻）安徽教育出版社  
胡頌平（1990）『胡適之先生年譜長編初稿』（10巻）聯經出版社  
胡明（1996）『胡適伝論』人民文学出版社  
耿雲志編（1999）『胡適評伝』上海古籍出版社  
耿雲志（1985）『胡適研究論稿』四川人民出版社

- 耿雲志（1996）『胡適新論』湖南出版社
- 羅志田（1995）『再造文明之夢―胡適伝』四川人民出版社
- 李又寧編（1998）『胡適与国民党』紐約天外出版社
- 李敖（2001）『胡適評伝』台湾中国友誼出版公司
- 劉篠紅（2000）『嘗試者―胡適』湖北教育出版社
- 李敖（2001）『胡適評伝』中国友誼出版公司
- 欧陽哲生（1993）『自由主義之累―胡適思想之現代闡釈』上海人民出版社
- 欧陽哲生編（1998）『胡適文集』（12卷）北京大学出版社
- 欧陽哲生編（2000）『解析胡適』北京社会科学文献出版社
- 沈衛威（1991）『文化・心・人格―認識胡適』河南大学出版社
- 沈衛威（2000）『百年家族―胡適』立緒出版社
- 呉福輝、錢理群編（1995）『胡適自伝』江蘇文芸出版社
- 小田・季進（1999）『胡適伝』団結出版社
- 楊貞徳（2000）「胡適科学方法観論析」欧陽哲生編『解析胡適』社会科学文献出版社
- 周質平編（1995）『胡適早年文存』台湾遠流出版社
- Jerome B. Grieder（1970）（中国名賈祖麟）*Hu Shih and the Chinese Renaissance: Liberalism in the Chinese Revolution, 1917-1937*: Cambridge:Harvard University Press. （張振玉訳『胡適之評伝』南海出版社、1992年）
- 緒形康（2004）「哲学の運命―胡適とデューイー」『特集 東アジア思想における伝統と近代』6月号、257-272 中国社会科学学会出版
- 張靜（2009）「胡適の旧白話小説について―啓蒙小説『真如島』を中心に―」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』No.10：284-268 愛知県立大学大学院国際文化研究科出版
- 山口栄（2000）『胡適思想研究』言叢社
- 吉川幸次郎訳（1946）胡適『胡適自伝』養徳社